北星学園大学経済学部北星論集第61巻第１号（通巻第80号）（2021年９月）・抜刷

【研究ノート】

言葉の探求
ショート・チョットの笑劇場②

増　田　辰　良

研究ノート

言葉の探求　ショート・チョットの笑劇場　②

増田辰良

目次

はじめに
ショート・チョット集　②

はじめに

人間は言葉の介在なしには生きていけません。私たちは、一日中、誰とも話さなくても心の中では無意識に言葉を使っています。それがふと出る独り言です。もちろん、人間で構成される社会も言葉を介して機能しています。

この文章を書いているときも頭の中では言葉が浮き沈みしています。言葉を使って思考します。文章だけではありません。野球のピッチャーがカーブを投げる練習をするときも指にボールをこう挟んで、腕はこう振って……というように、動作とともに頭の中で言葉を浮かべています。

人間は言葉を通じて想像（思考）し、そこから何かを創造しています。創っているのは〝物〟だけではありません。心の中にある世界像をも創り、さらにそれを創り変えることもできます。誰かの言葉（発言や文章）から勇気をもらったり、逆に傷つけられることもあります。言葉やそれを使った想像力が人間の思考の糧になっているとも言えます。長い時間をかけて考え抜かれ選び取られた言葉は重く、多くの人たちの心を打ちます。

この言葉が詰まったものが小説、エッセイ、評論、新聞などです。いわゆる活字です。身の回りの世界が言葉で構成されているのであれば、この言葉にかかわる能力を高めない手はない、ですよね。ですから、何か言葉を読むという行為、読書はすべて言葉と密接にかかわっています。

こう書いてくると言葉は人文・社会科学系の領域においてのみ力を発揮するかのようなイメージを受けるかもしれません。しかし、言葉は数学に代表される理科系においても力を発揮します。数学といえば、公式を覚え、例題で解き方のパターンを学び、それを応用して問題を解くというイメージを持たれがちです。これは数学に対する正しい評価ではありません。

数学はまず演算（計算）力を鍛えてくれます。演算には「言葉で書く」作業をともないます。数学は読むだけではだめで、自分で書いて

キーワード：言葉、ショート・チョット、笑い（ユーモア）

（1）

計算しないと身に付きません。次に作図された問題や記述式の問題はその背景にあること、作問者の意図を読み解くという想像（思考）をしなければなりません。想像するには頭の中で言葉をまとめる作業が必要です。

なんでもそうですが、頭の中で整理するためには書く必要があります。書くことによって自分の思考そのものが整理できます。こう理解すると数学は文字記号という言葉を使う哲学であることが分かると思います。

ですから、言葉の詰まった本（文章）を読むことはあらゆる思考能力を高める最良の方法なわけです。それは社会や世界、他人への理解度を高めることにつながります。本を読むことは生きることと等しいわけです。

（**付記**。穂村弘「ひもとく　番外編　読書は必要か？」『朝日新聞』2017年4月16日。『朝日新聞』川上未映子「本から学ぶ　本でつながる」2018年3月25日。バーナード・マラマッド（小島信夫ほか訳）、2019、「レンブラントの帽子」『レンブラントの帽子』夏葉社所収は、友人に一言〝帽子〟とかけた言葉から生じる心模様の複雑さを描いた作品です。言葉の不思議を知る格好の描写がされています。）

ショート・チョット集　②

演技力

本田（ほんだ）マユミは大学4年生で就職活動中である。これまで18戦全敗、まだ内定をもらっていない。書類審査、筆記試験は通過できるのであるが、面接がどうも上手くいかない。落とされるたびに全人格を否定

（二）

され、自分は社会から必要とされていない、という自己嫌悪に陥りかけていた。歯がゆさのあまり、自分に足りないものは……、補うべきものは……、会社が自分に求めるものは……、自分に相応しい仕事は……、と独り言を呟くようにさえなっていた。そんな精神状態ではあったが、根はいたって陽気な性格である。今回も志望する会社の最終面接にまでこぎつけていた。

ここは某芸能プロダクションの就職面接会場。社長秘書1名の最終選考をしている。面接室の外に並べられたパイプ椅子には激戦を勝ち抜いてきた十数名の女子学生たちが不安そうな顔をして待機している。

いま、室内では3名の候補者たちが役員面接を受けている。その中に本田マユミもいた。

長テーブルの中央に座る年嵩（としかさ）の役員が落ち着いた口調で訊いてきた。

「なぜ、社長秘書という仕事に就きたいのか。説明してください。ではAさんから、お願いします」

3つ並んだ椅子の右端に座っている候補者Aは、緊張のあまり今にも失神しそうな青ざめた顔で答えた。

「大学では秘書学を専攻し勉強を重ねてきました。なので、その知識を御社で活かしたいと考えたからです」

そう答えると「はぁ」と聞き取れない安堵（あんど）の吐息（といき）を漏らした。

続いて、真ん中に座っている候補者Bも強張った顔でややうわずった声で答えた。

「私はラグビー部のマネージャーをしてきました。人や組織の動きを調整する仕事に興味があって、社長という会社のトップの方のビジネスパートナーになりたいと考えたからです」

話し終わると彼女は膝の上に置いた両拳（りょうこぶし）をぎゅっと握った。

マユミは隣に座っている2人の候補者を気にかける余裕などなかっ

た。これは高収入と安定した未来への切符を手に入れるための戦なのだ、ここは戦場だ、と心の中で強く自分に言い聞かせていた。

役員の目がマユミに向けられた。一瞬、1本の冷や汗がつーっと背筋を落ちていくのを感じた。マユミは一言一言かみしめるように答えた。

「社長は社員のみならず、その家族たちの生活や将来についても責任を負っています。秘書はその社長の右腕に当たる重要な仕事を任されます。そんな右腕となる仕事を御社でしたい、と考えたからです」

われながら申し分のない答えができた。

次に右端に座り、牛乳瓶の底のように分厚いメガネをかけた胡麻塩頭の役員が訊いてきた。

「秘書にとって、一番大切なことはなんでしょうか？　それを一言で答えてください」

この最後の「一言で」という言葉に候補者3人は思わず視線を天井に移しそうな顔付きで反応した。

「では、Aさんから、どうぞ」

その声はイジワルそうに聞こえた。

候補者Aは口元をごにょごにょと動かしてから答えた。

「気遣いです」

「じゃあ、Bさん」

役員は顎に手を当てて、睨むような目をしていた。

候補者Bはその目に気圧されたように身体を少し反らせてから、答えた。

「調整力ですかね」

その声は弱々しかった。

「はい、じゃあCさん」

そう声をかけると、役員はメガネの端を軽くつまんで持ち上げた。メガネの奥には狐のような尖がった目があった。

マユミは、それに怯むことなく、意識して張りのある声で答えた。

「決断力です」

答えてから、役員たちの表情を窺ったが、どの顔も平気の沙汰というふうに見えた。

候補者たちの答えは役員たちにとってありきたりな陳腐なものだったのだろうか。

間髪を入れずに、左端に座る役員が真剣な口ぶりで訊いてきた。

「質問とすれば、よろしくないのだけれども、例えば、社長を中心として粉飾決算をしようとしている確かな情報を社内の誰から知らされた、としましょう。こんなとき、秘書として社長にどう対応しますか」

言い終ると、役員は腕組みをして候補者Aを見た。

Aはしばし目を閉じて黙考した。質問が質問だけに時間をかけて答えたかったのであろう。

「私が秘書であれば、社長に直訴して、粉飾決算は止めていただきます」

「ほう。もし1回限りの粉飾決算であって、またこれで社が持ちこたえる、という場合だとどうですかね」

役員はツッコミを入れてきた。

「それでも法に触れることだけは絶対に避けたいです」

Aはきっぱりと言い切った。

「Bさん。どうですか？」

「はい。秘書にはそんな重大な意思決定の一部を任されたくないです。顧問弁護士もいらっしゃるでしょうから、相談します」

力強く答えた。

「じゃあ、Cさん。どうですか？」

（三）

役員のその口ぶりはもっと違った答えをくれ！というふうに聞こえた。

マユミは背筋をぴんと伸ばして、右から左へと役員たちの顔を見てから、

「社長を中心として、粉飾決算をするような会社であれば……」

ここで言葉を切った。

すると、すかさず役員は「あれば……」と続く言葉を要求した。

マユミはしょうがないという顔を役員に向けて「そんな人物が社長をしている会社であれば、この際、清算してしまいましょう」と声高に答えた。

目の前に居並ぶどの役員たちもこの答えには面食らったようで一瞬、鳩が豆鉄砲を喰らったような表情をした。重たい空気がざーっと降ってきた。

それを振り払うかのように中央に座る役員が「んんっ？　んんっ？」と空咳を吐いた。

その後、他の役員たちからも幾つか質問がされた。候補者たちは無難に対応していたようだ。役員たちの苦虫（にがむし）を噛み潰したような表情からは、候補者たちには甲乙が付け難いことが窺えた。

マユミも他の候補者たちも面接時間の長さに苛立ちを覚えはじめていた。

そんな雰囲気を察したのか、中央に座る役員は両隣の役員に交互に軽く耳打ちをしてから、厳しい顔付きで「これが最後の質問になります」と、候補者たちを促した。

「社長秘書になったつもりで、芝居をしてみてください。どんな芝居でもいいです」

そう言うと、役員はほっとしたのか口元を緩めた。

（四）

トップバッターの候補者Aは先ほどとは打って変わって明るい声で電話の応対を演じた。

「（右手を受話器のようにして）はい。こちらは社長室でございます。私（わたくし）は秘書のAです。ただいま、社長は不在しております。本日は、出社の予定はありません。ご用件は私が承ります。確かに……はい、承りました。では後日、こちらからご連絡いたします。失礼いたします」

Aは軽くお辞儀をした。

役員たちは腕組みをしたまま表情一つ変えることなく、聞いていた。天井を見上げる役員もいた。無難な芝居のように思えたが。

続いて、候補者Bはリクルートスーツの内ポケットから手帳を取り出しペラペラと捲りながら演じた。

「社長。本日のスケジュールですが、10時に××銀行の頭取がお見えになって、融資の件で打ち合わせがございます。それが終わりますと、12時には役員たちとの昼食会が予定されております。……午後は13時より決済文書に目を通していただきます。問題がなければ押印をしていただき、その後15時より第3会議室で新規事業の立ち上げに関するプレゼンテーションへの参加がございます。退社予定時刻は17時30分を予定しております。以上です」

話し終わると、Bは役員たちの顔を順番に見てから恭しく頭を下げた。ぜひ、採用してくれ、という目力で意思表示をしたようだ。それもそのはず役員たちの目にはBの芝居を楽しむような生き生きとした光が宿っていたからだ。

最後にマユミが呼ばれた。マユミは「はい！」と元気よく返事をして、すっと立ち上がると、全員に背を向けて、ドアへと進んだ。役員たちだけでなく、他の2人の候補者たちの訝（いぶか）るような、はたまた好奇な視線を背中にピリピリと感じた。

それにかまうことなく、マユミはドアに手をかけて、開け放した。廊下には面接を待っている学生たちが不安を押し殺したような顔で椅子に座っていた。

マユミの顔が見えると、いっせいにこちらに向いた学生たちに対してマユミは告げた。顔にはにこにこっと輝くような笑みを浮かべて、「学生の皆様、本日はお疲れ様です。私は明年4月より門松社長の秘書を務めます本田マユミという者です。社長秘書1名の最終選考はただ今の面接をもちまして私、本田マユミに決定いたしました。エントリーシートをはじめ幾つかの選考書類を作成、提出していただき、また本日は早朝より長い時間、お待ちいただいて皆様には誠に申し訳ありませんでした。全役員一致の決定です。ご容赦ください。これにて面接試験は終了させていただきます。どうかお忘れ物などなさいませぬように、またお気をつけてお帰りください。皆様方の今後のご健闘をお祈りいたします。本日は、誠にありがとうございました」

こう言い終る深々とお辞儀をした。

その日の夕方、マユミは会社よりメールを受け取った。

『本田マユミ殿　貴殿を当社の専属芸人として採用いたします。芸人養成株式会社　社長　門松笑福』

熟読ですか？

老妻が「マイナンバーカード交付申請書」の文面を睨みつけるような目をして毎日、読んでいる。

文面が難しいのかな？

いえ、認知症です。

視野の広い人

人通りの少ない歩道に1万円札が落ちています。

あなたならどうしますか。

見過ごすこともできますが、もちろん拾いますよね。

拾って交番へ届けるか、あるいはそのまま足早に持ち去りますよね。

え～っ！　違います？

拾ってから、まだ他に落ちていないか360度見回します。

なるほどぉ、そうですかぁ。

合格発表の掲示板の前にて

―　合格か否かは応募手続の受付順に決めているわけではないが……。

子供　あ～ぁ、前の他人が受かっている！

母親　だから、早く願書を投函しなさいって言ったでしょ。

同業者

―　詐欺師Sが詐欺師Yに電話をかける。

S　もしもし、はじめまして、私、ロト情報分析社営業部主任の鈴木晃と申します。いま、お時間いただいてもよろしいでしょうか。

Y　はい。いいですよ。ご用件は何でしょう？

S　はい。ありがとうございます。わが社の主たる業務はロトの当たり番号を予測し、それをお客様にご提供することです。このたび、

（五）

そのお客様として、わが社の顧客情報の中から吉田利行（よしだとしゆき）様が選ばれました。おめでとうございます。膨大なビッグデータを分析した結果、確実に5億円の賞金が手に入るロトの当たり番号をあなただけにご提供します。あなたは実に幸運な方です。

Y　あぁ、ロトですか。そうですか。確実に当たるのですね。

S　はい。１５０％当たります。わが社は45年の実績があり、これまで多数のお客様にご奉仕してまいりました。心配、ご無用です。13時までに指定の銀行口座へ２００万円入金していただければ、折り返しご連絡を差し上げます。13時を過ぎますと、あなた様の権利は消滅いたします。すぐにコンビニのＡＴＭへ行って、こちらの指示どおりに入金してください。

Y　なるほどね。確実にもうけるのであれば、ロトより株でしょう。株は配当金とキャピタルゲインを手に入れることができますからね。実はあなただけにこの情報を教えるのですがね。こういう電話をお待ちしておりました。私、手元に未公開株で近いうちに上場される株をもっているのですよ。そのうちの１０００株をお譲りしてもいいですよ。証券業界でも一押しの株です。確実に１８０％値上がりします。２００万円を13時までに指定の銀行口座へ振り込んでいただいて、こちらで入金が確認されしだい、折り返しすぐにユーパックで１０００株を送ります。ロトより確実な投資です。口座番号をお教えしますのでメモをとってください。慌てることはありませんよ。しっかりメモをとってくださいね。それからスーパーのＡＴＭへ行って、こちらの指示どおりに入金してください。

S　じゃあ、お互いにＡＴＭの前でもう一度、連絡を取り合いましょう。

Y　了解です。

（六）

オレオレ詐欺

―　せっぱ詰まった涙声で。

詐欺師　もしもし、あぁ、母さん！　俺だけどさあ。あぁ、もうだめだ！　俺。クシュクシュ。

母　どうしたんだい。泣いたりして。

詐欺師　俺さあ、もう会社辞めなきゃならないよ～。不倫相手に子供ができちゃって、これが旦那にバレてさあ。慰謝料１００万円、払わないと裁判所へ訴えるって脅されてんだー。あ～あ～ぁ。今日中にレターパックで１００万円送ってくれないかなぁ。お願いだよ～～。あ～あ～ぁ。もう駄目だ！

母　あら、嬉しい。初孫。早く、だっこしたいねぇ。

病気です？

―　ある夫婦が子供の卒業式に出席する日の朝。

早く身支度のできた夫はドアの外で奥さんを待っている。少し遅れて奥さんが足早に玄関へ来た。下駄箱から礼服用の黒靴を出したようだ。

「足が入らない。靴下が厚いのかな。いやだ！　靴が小さくなっちゃったんだぁ」

それをドア越しに聞いていた夫はドアを開け、声をかけた。

「違うだろ。お前の足がむくんでいるんだ」

愚痴の成果

妻　お父さん、仕事や職場の愚痴ばかりこぼしてるじゃない。
夫　人生において愚痴は大切だ。
妻　大げさねぇ。男は愚痴るもんじゃないわよ。
夫　いいか、愚痴が言えるということは何かとてつもなく困難な壁を乗り越えようともがいている証拠なんだぞ。
妻　へ〜〜っ。証拠でもあるの？
夫　あるさ〜。若い頃、女性と出会う機会が少なくて、大学の先輩に女性を紹介してくださいって愚痴ってー愚痴ってー愚痴り倒して〜〜結婚した相手が……お前じゃないか。

真意が違います

―　季節は卒業式シーズン。
かつて、後輩の女子生徒が卒業生の男子生徒から学生服のボタンをねだることが流行った。狙われるのは上から2番目のボタンである。ハート（心臓）に一番近いというのが理由であった。
女子生徒　先輩、ボタンください。先輩！　先輩！　2番目のボタン！
卒業生　（ニッと笑い）しょうがないなぁ。はい、どうぞ。
女子生徒　やった！　先輩、ありがとう。クラスのね、Mくんにあげるんだ。良かったぁ。だってね、彼、ボタンが2個取れて失くしてしまちゃったの。先輩、お願いします。もう1個、ください！
卒業生　……う〜っ、そっかぁ。

見栄の張りすぎ

―　季節は卒業式シーズン。
かつて、後輩の女子生徒が卒業生の男子生徒から学生服のボタンをねだることが流行った。狙われるのは上から2番目のボタンである。ハート（心臓）に一番近いというのが理由であった。
女子生徒　先輩、ボタンください。先輩！　先輩！　ボタン！
卒業生H　しょうがないなぁ。2番目のボタンだよね。はい、どうぞ。
女子生徒　やった。先輩、ありがとう。本当は先輩のこと好きだったんですよ。寂しくなるなぁ。
それを見ていた別の卒業生WがHに声をかけます。
卒業生W　あのさぁ、おれなんかさぁ、このとおり、ぜんぶ取られちゃったよ。あ〜ぁ、やってられねえよ〜。ハッハッハッ。
卒業生H　だっさぁ。しまんねぇ〜。

そうですか？

♪うちの女房（かかあ）と食（く）う絶品料理も
きれいなねえちゃんと食う絶品料理も
料理に変わりがあるじゃないし
食ってひり出しゃ
みな同じ。♪
（付記。これは♪富士の高嶺に降る雪も、京都先斗町に降る雪も……♪の替え歌です。）

（七）

長すぎるトンネル

秋の読書週間、男は一念発起して川端康成の『雪国』を読みきろうと決心します。総ページ数３００、毎日20ページ読めば、15日で読みきれる。その日をカレンダーにマークします。

布団の中で読み始めます。

1日目　国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。……。

眠ってしまう。翌朝、今夜40ページ読めばいい、と反省する。

2日目　国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。……。

眠ってしまう。翌朝、これではいけない、今夜こそ読み進めるぞ、と心を強くする。

3日目　国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。……。

眠ってしまう。翌朝、カレンダーのマークを見ながら、まだ決めた期限までは十分ある、と自分に言い聞かせる。

4日目、5日目……12日目……。

予定の15日目になった。

今夜も男は「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。……」眠ってしまいます。

翌朝、男は「あ～ぁ」と嘆息してから「トンネルが長すぎるんだ。正月休みにまとめて一気に読もう」と計画を変更します。その顔には怖い夢から覚めたような安堵感が漂っていた。

妥当な判断

新任の警察署長は所轄の警察官の不祥事を謝罪し、「改めて、清廉潔白な市民に信頼される警察業務を目指す」と誓った。しかし、警察官の不祥事が後を絶たない。署長は率先して「ポリグラフ検査」を受けることにした。

（八）

不肖事

新任の警察署長は「この街から犯罪を無くす」と豪語した。そして犯罪を署内に持ち込んだ。

実力？

孫　おじいちゃん、ゴルフの優勝トロフィがたくさんあるね。みんな会社に勤めているときにもらったのでしょ。ゴルフ上手かったんだね。

祖父　今はもう社長じゃないので、ゴルフの試合に勝ったことはないよ。

有能な上司

―　昼休み。

S　最近、うちの課長、ヘマばっかりしているよな。信じられねえよ、なぁ。

Y　そのとばっちりが部下の俺たちにそのうち回って来るって。

S　でも、何でぇ、あの人が課長になれたのかな？　普通じゃ考えられないもの。仕事できないし、ミス見つけられないし、人を纏（まと）める能力もなければ部下の首を切る決断もできない

し、ナイナイづくしだぜ。どっこがぁ、いいのかねぇ？　社内に有力なコネでも持ってんのかな。

Y　いや、あの前の課長がやけに優柔不断な人で、いわゆる何かをはっきりと決められない人だったそうで、ついに関連の子会社へ出向させられたそうだ。その後釜に今の課長が昇格したらしい。

S　へ〜〜っ。もっとスッパと何でも判断できる上司の下で仕事したいよな。これじゃ優秀な俺たちのような宝の持ち腐れだよなあ。

Y　あ〜ぁ、まったく同感だ。

―　数日後。

S　おい、聞いたかよ。やっぱ課長、どこかの下請けへ出向になったそうだ。それも地方らしい。

Y　おぉ、聞いた聞いた。ご愁傷様だよ。替わりにスパッと意思決定のできる有能な人が来るといいがなあ。俺らもバリバリ仕事をしたいしなぁ。

新課長　鈴木さん、吉田さん、この部署の業務は私と他1名で十分足りますので、あなた方は今月末日付けで孫請け会社へ転籍になりましたから。その準備に取り掛かってください。

職務怠慢

医者　今日はどうされました？

患者　最近、不眠症がひどくてつらいのです。睡眠薬をいただけません？　少量でいいですから。

医者　どれくらいひどいのです？

患者　はい、勤務時間中も眠れないのです。

理解力の違い

―　ある日。

教授　そこの学生たち、講義中、私語は厳禁ですよ。

学生　私語ではありません。討論していたのです。

―　別の日。

教授　そこの学生たち、講義中、おしゃべり、私語は厳禁ですよ。

学生　死語ではありません。おしゃべりは現代語です。

表札　山田倉蔵・カネ

―　寝室を別にする老夫婦の家に夜中、強盗が入った。

強盗　やい、じいさん、おとなしく金を出せ。

おじいさん　おっ、驚いた。こんな夜中にどちさんですか？

強盗　おれは強盗だ。

おじいさん　ええっ？　どちらの後藤さんですか？

強盗　変なシャレを言いやがって、寝ぼけてんのか。このじじい。おれは他人様から金を奪う盗人だ。

おじいさん　バッバッバカなまねは止めなさい。

強盗　騒ぐんじゃねえよ。静かにしろってんだ。この包丁が見えねえのかい？　早く金を出せ。でなけりゃ、ぶっ殺すぞ！　金を出しゃあいいのさ。金を！　おれは金が欲しいんだよ。たまらなく金が！　金!!

おばあさん　カネ、カネ、欲しいって、おじいさん、今夜は寂しいの

（九）

かい？　フッフッフッ。

水族館

―　自称魚博士を名乗る男が水族館へ来た。
男　あぁ、これ知ってる。マダイとアジだよね。
係員　はい、そうです。
男　それから、これはタコで、向こうはミズクラゲだ。
係員　よくご存知ですね。
男　それからそれから、え～と、あれは何ていったかな？　こっちを見てる、人面魚、確か名前は、え～とねぇ。知ってんだけどねぇ、名前が～名前～が出てこないなあ。くそ！
係員　そこは鏡です。

世界を目指せ

―　健ちゃんの夢は大海原をヨットに乗って世界中を旅することです。
お母さん　おや、またオネショしちゃったねぇ。見てごらん、日本地図のようだよ。
健ちゃん　世界へはまだ遠い！

初詣

「いいかい。この箱の中に5円玉を入れるんだよ。5円玉は願いをかなえてもらうために、お神様に差し上げるからね。それからこの大きな鈴をカランカランと鳴らして、手をパチパチしてお願いするのよ。

（一〇）

さあ、やってごらん」と母親は幼児に教えます。
「さあ早く、5円玉を箱に入れなさい」と促しますが、幼児は5円玉をギュッギュッと握って放そうとはしません。
幼児は顔を斜め上向きにして母親の目を見て訴えます。
「だってお神様、どこにもいないよ。見えないよ。もったいないよう」

幼児の願い

幼児は5円玉を賽銭箱に投げ入れ、両手で鈴の太縄を握り、カランカランと鳴らし、パチパチと両手を合わせ、願掛けをした。
「５００円になりますように！」

味覚の相違

「ケーキやチョコばかり食べてたら、そのうち糖尿病になっちゃうぞ。糖分を摂りすぎると、何にもいいことないんだから」と、母親が娘を諭します。
すると娘は、「そんなことないよ。あるも～ん。おいしいことよ」と、口答えした。

磨く

―　おじいちゃんと孫がお風呂に入っています。
祖父　どれ、おじいちゃんが背中を流してやろう。ピカピカになるまで磨いてやろう。
孫　そんなにごしごししたら痛いよ。

祖父　痛いくらい、ごしごししないとツヤがでない。
孫　　おじいちゃん、今度は僕が背中を流してあげるよ。
祖父　おぉ、そうか。ごしごしできるかな？
―　背中に回った孫。
孫　　おじいちゃん、頭をごしごしして痛くなかったの？

未練

ある朝、通勤バスを待っているとバス亭に隣接しているアパート群から婦人が小犬を連れて散歩に出てきた。犬はその習性を発揮し鼻先をジャリ石に擦りつけて何かを物色しつつ右へ行ったり、左へ行ったり、進んだり、戻ったりしている。そのたびにリール（紐）を持つ婦人の身体もあっちこっちした。

車道に近い歩道の端には電柱があり、鼻先を下にしたまま小犬は電柱に近づくと一層、嗅覚を鋭くして顔を上下左右にして嗅ぎまわったかと思うと、マーキングしようと後ろの右足を持ち上げた。

その瞬間、アパートの2階の窓が開き、

「お母さん、電話だよ！　急いで！」

婦人の娘であろうか、その顔と声が飛び出してきた。

「ああ」

と窓に向って返事し、慌てて婦人はリールを引き方向転換し、アパートの階段へ戻ろうとした。

マーキングの体勢に入り、右足を上げた子犬はその状態でケンケンをしながら無理やり引っ張られながら、婦人の後に従った。

声を出して笑うわけにもいかず、目を細め口元を緩めた私の横を小犬はケンケンをしながらバツの悪そうな表情をして過ぎた。その眼にはまだ遣り残したことがあるのに……と言いたげな未練が浮かんでいた。

粋な寿司屋？

へい！　いらっしゃい！　自慢じゃないが、うちの寿司は、ネタもシャリも古いが、サビだけは効いてますぜぃ。

やっぱ禁煙でしょう

このタバコ、ニコチンの含有量は少ないが、肺ガンになる元菌（もときん）はたっぷり入ってます。
このタバコ、ニコチンの含有量は低いが、含まれる税金は高いです。

都市に住む　①

突然、空が真っ暗になり、雷鳴とともにバケツをひっくり返したような大雨が降り出した。男はバックを頭に乗せ、ビルの入口へと駆け込んだ。濡れたスーツの腕をハンカチで拭こうと顔を右に向けた。稲光のする大雨の中、ビルの壁沿いに若い女性が頭を垂れたまま突っ立っていた。びしょ濡れである。小脇に抱えた紙袋も濡れるにまかせている。足元を見ると、うす緑色のパンクスを履いている。

男はおもわず声をかけた。

「雷に打たれますよ。風邪を引いてしまいますよ。ここにお入りなさい」

女性は俯いたままである。その雰囲気は何か深く悩みこんでいるようにみえた。まるで滝に打たれる修行僧のようであった。激しい雨音

（一一）

で聞き取れないのか、と思い、男は叫ぶように大声を発し手招きした。
「あなた、そこのあなた！　ここが空いていますよ。ここに来なさいよ！」
女性はようやく少し顔を上げ、恥じらいの表情をしたまま、男のいる近くの壁まで来た。女性は頬を染めているように見えた。そして、俯いたまま答えた。
「私、雷も雨も平気です。もうすぐ止みます」
その声は声というよりも音のように聞こえた。しかし、男は紳士的な振る舞いで、もう一度、雨宿りを勧めた。しぶしぶ女性は男の助言に従った。
ほっとした男は雨空を見上げながら、さらに声をかけた。
「ゲリラ豪雨ですね。まいちゃいますよね」
女性は俯いたまま口元に笑みを浮かべていた。
男は紙袋に目をやり「大切な荷物がずぶ濡れになっちゃいましたね。突然、この大雨ですから」と促すと、ようやく女性は顔を上げ、降りしきる雨の空に目をやった。男はそのヌルッとした横顔を見て、驚き不安になった。女性が紙袋から取り出したのは本であった。すべて蛙に関する学術書だった。
「私、自分の祖先のことを知りたくて勉強しているの」と女性は言って、ギョロとした目で男を睨みつけた。
（付記。これはバリー・ユアグロー（柴田元幸訳）（２０１３）「水から出て」『一人の男が飛行機から飛び降りる』新潮文庫所収からの翻案です。）

都市に住む　②

暴風雨の中、バス亭にずぶ濡れになった若い女性が頭を垂れて立っていた。見ると、小脇に紙袋を大事そうに抱えている。
男は近づき、その強い体臭に怯（ひる）みながらも親切そうに声をかけた。
「風邪をひいてしまいますよ。今日は生憎の空模様なのでバスは運休になったそうです」
顔も上げず、女性は答えます。
「あら、そうですか。でも平気ですし、いつかは止みますから」
男は下心からか、丁重かつ紳士的に誘います。
「私のアパートがすぐそこにありますから、シャワーを浴びて、温かいコーヒーでもご一緒しませんか。暖まりますよ」
女性は恥じらい、ためらっていたが、結局、不安げな表情をしたまま男に従った。シャワーを浴び、コーヒーカップを両手で抱える女性は、何か真剣に思い詰めているような表情を崩さなかった。
男は励ました。
「何か悩み事でもあるのですか？」
と言いつつ、女性に身体を近づけ、まだ乾ききらないその髪に顔を近づけようとした。
シャワーを浴びたはずなのに、まだ体臭、いや動物臭がし、男はたまらず顔を背け不快を顕わにした。それに気づいた女性は顔を赤らめ、それを隠すかのようにコーヒーカップを唇へもっていった。一口飲んだ後、雨でびしょ濡れになった紙袋から本を取り出した。どれも肉食の野生動物に関する学術書であった。女性はキラリと光る犬歯を見せ、「自分の祖先についてもっと多くのことを知りたいのです」と言って、男を睨みつけた。
（付記。これはバリー・ユアグロー（柴田元幸訳）（２０１３）「水から出て」『一人の男が飛行機から飛び降りる』新潮文庫所収からの翻案です。）

ご自分より体力のある大型犬を散歩させてはいけません。

老人への警告

人間の主張

一月ほど前までハイハイをしていた幼児がお母さんに手を引かれ陽だまりをよちよちと散歩しています。道端の可憐な花を見つけては、お母さんが促します。

「きれいな花だねえ。こっちにもあっちにもあるね。きれいだねえ」

そうすると幼児もつられてしゃべります。

「きれだね。ななだね」

これはタンポポだよ。きれいだね。

「タンポだよ。きれだね」

向こうからお婆さんが腰を屈め両手を後ろ手に腰の辺りにしてゆったりゆったりと歩いてきます。何やら背中に動くものを背負っているようです。ゆったりゆったりとお婆さんは母子の横を通り過ぎました。どうやらお婆さんは茶毛のダックスフントをおんぶしているようです。

お母さんは「ぽかぽかだね。いいね。さて、いこうね」と幼児の手をとろうとします。ところが、仁王立ちした幼児は「だっこちて。おんぶちて、おんぶ！」と叫びはじめました。

お母さんは優しく諭します。

「もうハイハイの赤ちゃんじゃないからね。歩こうね」

「やだ〜。おんぶ！　おんぶちて！」

幼児はお母さんの手を振りほどこうと懸命です。

お婆さんの背中でダックスフントは振り向こうと頭を横に傾け情けないような、気まずそうな表情で耳をぴくぴくと動かした。

判断基準

―　ゴミ収集日。

妻　今日は生ゴミかな、燃えないゴミの日かな。ねえ！　どっちだったかなあ。

夫　カラス、いるか？

経済センス

―　アメリカへ単身赴任している父親から息子へメールが届いた。

「お正月、おめでとう。今年は奮発してお年玉を1万円あげるよ。お父さんの代わりにお母さんから受け取りなさい」

息子は返信した。

「円安だから、1万2000円もらいます」

料理は眼で食す

軽快な音楽とともにTVの料理番組が始まった。妻はこの種の番組を観るのが好きだ。それも10分ほどで作れる〝カンタン料理〟が好きである。

「鶏肉、100グラム。髭ねぎの大2本。砂糖、大さじ1ぱい。みりん、小さじ1ぱい。酒、大カップ1ぱい。これだけの材料でかつ10分で美味しい〝カンタン料理〟が作れます」と、TVの料理小母さんは

（一三）

しゃべります。
その横でアシスタントとしては風采の上がらない小父さんが「これだけの材料でいいのですか？」と、驚いてみせる。
「ねぎを大きめに切ってください。トントントン。茹でますので、大きくても縮みますからね」
小母さんは実演をする。
小母さんは火の点いたガス台に鍋をのせ、そこへ酒、みりん、砂糖、さらにねぎを入れ、その上に鶏肉をのせる。
「水は使わないのですか？」
小父さんは、さも不思議そうに訊ねる。
「はい。これだけのねぎを使いますので、その水分が出ますから、水は使いません」
小母さんがしたり顔で答える。
小父さんは「なるほど〜」と、合点した相槌を打つ。(見れば分かるだろ。ねぎが山盛りになってんだから)
今日のレシピは10分で完成する〝カンタン料理〟である。
「では、こちらの鍋には10分前に調理したものが出来上がっています」
小母さんは小父さんに声をかけます。
器に盛られた〝カンタン料理〟を小父さんは一口二口、食します。そして「ねぎが甘いですね〜。鶏肉もとろけるように柔らかいです」と、感嘆の声をあげる。(もっと他に気の利いたコメントをできんのか？　あんた視聴者の代表として味見をしてんだろ)
さて、TVの前では、今にも涎(よだれ)を垂らしそうな亭主の溜息がもれる。
「美味そうだなあ」
その横でやや肥満気味の妻は満足そうな表情で画面に観入っている。妻にとっては至福の時間が過ぎているのである。一言も発しない。

（一四）

また、亭主が諦めにも似た溜息をもらす。
「カンタン料理かあ」
さらに催促するような声音に変わる。
「アバウトな味付けでいいんだろうなあ」
最後に、小母さんは「カンタン料理でした。皆さんもぜひ作って食べてみてください」、小父さんは「10分で作れますからね。カンタンですよ！」と、微笑ながら「では、さようなら！」
テーブルの上には料理雑誌に並んで分厚い手帳が置かれている。毎日、食卓に出したレシピが記入されているようだ。重複を避けたいのであろうときどき、開いて確認をしているのを見かけることがある。でも夕食に限れば毎夕、肉系、魚系の繰り返しである。TVで観た簡単レシピは手帳に書き込まれることはないのであろう。
「カンタン料理……かあ」
料理番組を観ようが、料理雑誌を読もうが、本物に近いものがテーブルに並ばなければ、胃液を過剰に分泌させて終ってしまう。
「美味そうだなあ。美味そうだよなあ。食(く)ってみたいなあ」
観ても腹が膨れるわけじゃなし、味が分かるわけじゃなし、料理は眼で食す、とは上手く言ったものだ。とほっほっほっ。

2人の浮浪者

駅のガード下に男2人の浮浪者がいた。1人が駅のゴミ箱から液体の残っているウィスキーの瓶を拾い上げた。それをもう1人が力ずくで奪い取った。そしてベンチに座り勝ち誇ったような表情で瓶の栓を開け、唇をつけ、右手で瓶の尻を高く上げ、流し込むよう一気に飲み干した。男は「あ〜あ、美味い」と言い残し、そのまま絶命した。瓶を

奪われた男は「あ〜、飲まなくってよかった」と、ほくそ笑んだ。

（**付記**。ゴミ箱の中のウィスキー瓶の所有者は誰か。落命者の命への償いはあるのか。あったとして誰が償うのか。）

観察

毎日、楽しい気分で過ごすには周囲を観察する姿勢でいることだ、と思って電車内での乗客を観察してみる。

スマホをしきりにいじくっている若い女性はときどき、ニヤニヤしている。その表情は幸せそうである。受験生であろうか。英単語帳を捲っては唇を小さく動かしている。感心、感心。

他の乗客と視線を合わせたくないのであろう、じっと目を閉じている初老の男性もいる。そうではないのか？　眠っているのか？　ムニャムニャと口元を動かしている。

みんな、本当は私のようにジロジロと相手を観察したいのだが、憚（はばか）られて視線をスマホ、単語帳へ落としているのであろう。

そうこうしているうちに、電車はターミナルへ到着し、降り口のドアが開く。スマホも単語帳もムニャムニャの人も無言で立ち上がり、そそくさとホームへ降り立つ。みんな本心はどうなの？

観察、終了。

金目の物

賊　　電報です！　電報です！　誰か、居ませんか？

住人A　「何だ。騒がしいなあ」と言って青テントの住人Aはテントの隙間から顔を出した。

賊　　「やい、金目の物があるだろ。出しな」と怖いお兄さんがドスの利いた声をかけます。

住人A　「ほ〜、盗人（ぬすっと）かあ」と青テントの住人は呟いて顔をすばやく引っ込めた。

賊　　「やい、何か出さないと、ぶっ殺すぜ」

住人A　「見てのとおり、金になるものは何もないぜ」と中から無愛想に答える。

賊　　「ウソ言うんじゃねえ。分かってんだよ。テレビ持ってんじゃねえか。テントの屋根にアンテナが付いてらあ」

住人A　「ふん、見栄だよ、見栄！　3つ隣へ行きな」

賊　　「3つ隣だと？」

住人A　「そいつは犬、飼ってるよ。咆えない犬だけどな」

賊　　「犬だと？」

住人A　「そう、このテント村にも経済格差の荒波が押し寄せているのよ」

賊　　「……？」

賊は3つ隣の青テントの入口でドスを利いた声で脅します。

賊　　「やい、犬を飼えるほど金を持っているそうだな。何か金目の物を出しやがれ。でなければ、ぶっ殺すぞ」

住人B　「ほう。盗人かあ。犬ならいるぜ。ほれ」

賊　　「何〜い！　ぬいぐるみじゃねえか。それもでかいセントバーナードじゃねえかあ」

住人B　「悪かったな。文句あっか。俺の愛用の枕さ。金目の物なら5つ隣へ行きな」

賊　　「馬鹿にしやがって隣だと。5つだと？　1つ、2つ、3つ、4つ、5つと」

（一五）

確かに大きな鐘がありました。そこは寺の山門です。
『悪事を悔い改めよ』という説教文が貼ってあった。

したむきな人とひたむきな人

何かに失望し自嘲気味に沈んでいるのは、したむきな人。
何かを目指し虚飾を張らず、こつこつと昇っていくのは、ひたむきな人。

未来が暗いのは、したむきな人。
未来が明るいのは、ひたむきな人。

失敗を予想させるのは　したむきな人。
成功を予想させるのは、ひたむきな人。

哀れみを誘うのは、したむきな人。
妬みを誘うのは、ひたむきな人。

朴訥（ぼくとつ）にならざるをえないのは、したむきな人。
朴訥であるのは、ひたむきな人。

したむきな人には、声を掛けよう。
ひたむきな人は、そっとしておこう。

したむきな人も幸運に気づくと、ひたむきな人になる。
ひたむきな人も不運に気づくと、したむきな人になる。

（一六）

したむきであれ、ひたむきであれ、どちらも〝我慢〟の姿勢がみえる。

受験生と教師

―　理系の大学を受験する予定の生徒が入試の過去問を持って数学の教師に尋ねる。

生徒　この問題の解き方が分からないのですが。
教師　どれ。……おい、教育大卒の俺に東大の入試問題を解かせるなよ。
生徒　仕事ですし。
教師　じゃあ、一緒に解こう。そこの椅子に座りなさい。

犬と人間

男の子　おじさん！　大変だ！　隣のお姉さんが犬に咬まれたよ。
おじさん　えぇ～。その犬を捕まえろ。
男の子　どうして？
おじさん　狂犬病の予防接種を受けているか調べなきゃ。

自分の値段

―　ある売れない作家が生活費を工面するために、蔵書の一部を古本屋へ持ち込む。

作家　これなんですが、引き取ってもらいたいのですがね。
店主　これですかぁ。10円ならば引き取らせてもらいますが……。
作家　え～っ!? 10円！　それはないでしょ。定価は1万5000円だし、出版社にはもう在庫もないものなんですけどね。もう手

に入らない自費出版の稀覯本ですよ。

店主　今頃、この種の本は裁断されてますよ。

作家　そんなはずはない。内容も良くて、学会で書評をされたこともある価値のある本なんだけど。定価の半額で引取って欲しいんだが……。

店主　（笑）ほとんど価値はないです。

作家　（怒気）いや、絶対に価値はある。私が保証しますよ。

店主　どうして、あなたにその価値が分かるのですか？

作家　私が著者だからですよ。

紛らわしい袋

義母　お昼は、冷ご飯があるので、お茶漬けでいいかい？

私　はい、いいです。お願いします。

義母　はい、どうぞ。

私　いただきます。

義母　……。

私　新商品ですかね？　いつも食べているものとは味がまるで違いますね。

義母　あら、そうかい。

私　……。

義母　袋に「のり玉」って書いてあるね。

私　それって、ふりかけですよ。

馬のす（巣）

カラ：小心もののカラス。

スー：悪知恵の働くカラス。

牧場で馬が若草を食んでいる。その臀部（でんぶ）にカラさんがとまっている。カラさんは巣作りをするために嘴で器用に馬の尻尾から毛を3本抜きました。その一部始終を見とどけたスーがやけに深刻な顔をして、近づき、

「カラさん、お前、えらいことをしたな。馬の尻尾の毛で巣を作るつもりだな。まさか馬の尻尾の毛を抜くと、どうなるか知らないのかい？」

と、思わせぶりに話かけます。

小心もののカラさんは不安になって、「どうなるのか、教えてくれ」と頼みます。

「よく見なよ。よりによって白馬の毛を抜いちまったんだぜ。白馬だけはいけない。昔から、白馬は神の仕えと言われているよな。それにたて髪ならまだしも、尻尾の毛を抜きやがって。尻尾だけはいけないよ〜。どうなるか知らないんだ？」

スーは教えるどころか不安をあおります。

さらに続けて、

「俺にとっちゃあたいした情報じゃないが、お前にとっては大事な情報だ。俺だってただでこの情報を手に入れたわけじゃない。親しき仲にも何とやらで、何か食わせてくれるなら教えてやってもいいぜ」

と、条件をつけます。

カラさんはトカゲ、バッタやカエルなどを巣作りしているメスのと

（一七）

ころへ運んでいるところをスーにすっかり見られていました。カラさんは知りたさと不安が募るばかりです。
「ご馳走できるようなものはない」と答えますが、
「じゃあ、しょうがない、教えない。せいぜい注意して行動しろよ」
スーは突き放します。
カラさんは仕方なく、承知して、スーを造作中の巣へと連れてきました。事情を聞いたメスガラスは貯めていたご馳走をスーの前へ並べます。気持ちの焦るカラさんはせっついてスーから聞き出そうとします。
しかしスーはどっかと腰を落ち着け、
「そう、慌てるなって、俺だって馬の尻尾の毛を抜いたところを年寄りに見られ、これこれこういう祟りがあるって聞かされ、震え上がったもんだ……。よくもまあ、馬の毛で巣を作るとはなあ……あ～しゃべるだけでも怖い、怖い。でも、教えられて勉強になったぜ」
スーはのらりくらりとはぐらかしながら、ついにご馳走を食べ尽くした。
「あ～あ、美味かった。ゲッポ、あ～ぁあ、ゲッポ。こんなに美味いご馳走をいただいたのは久しぶりだ。よくこれだけ貯えたもんだ。ゲッポ、感心するぜ。ゲッポ、ゲッポ」
満腹感に浸り、ゲップをしているスーの横でカラさんは、
「もう、教えてくれてもいいだろ。約束どおりご馳走したのだから」
と、急かせます。
「おっと、そうだったな。腹が膨れて約束事を忘れるところだったぜ」
「で、馬の尻尾の毛を抜くとどうなるんだよ」
「馬の尻尾の毛を抜くと……」
「うん、抜くと」

（一八）

「抜くとだなあ～」
「抜くと」
「馬が～」
「馬が、馬がどうなるんだい」
「……馬が痛がるだろ」
「ええっ？　え～え？　それだけのことか？　このやろう！」
「いや、それだけじゃあない。馬の尻尾のことを馬のす（巣）ってんだ！　覚えとけ！」
（**付記**。これは落語の「馬のす」からの翻案です。最後の2行がオリジナル文です。）

点検

―　ピンポーン。
検査員　さきほど、お電話をしました××ガス会社の○○です。ガス漏れ予防の点検に伺いました。
奥さん　あぁ、ご苦労様です。どうぞお入りください。
検査員　んっ？　臭ってますね。漏れてませんか？
奥さん　あら、いやだわ（笑）。ついさっき主人がオナラを漏らしちゃたものですから。
主人　漏れて、悪かったな。
検査員　いえ、気になさらないでください。機器が正常に働いているってことですから。

待ち人と来る

寂しいとき　向こうからやって来た郵便配達の赤いバイクが自分の家の前を通り過ぎ両隣へ配達しているのを窓から見ているとき。

嬉しいとき　向こうからやって来た郵便配達の赤いバイクが自分の家の前で止まったのを窓から見たとき。

うどん通

関西ではスープを掛けただけのただのうどんのことを「すうどん」と呼びます。酢が入っているわけではありません。うどんを吸い込むように食べるので「吸うどん」なのでしょうか？　いえ、違います。「す」は素顔の「素（す）」です。そのまんまという感じでしょうか。じゃあ、なぜ「すうどん」のことを別名「掛うどん」と呼ぶのでしょうか？　「すうどん」を何杯、食べられるか賭けをしたわけではありません。

どちらも麺にスープを掛けただけです。

すうどんはうどんの麺そのものを味わう感じです。

掛うどんはスープそのものを味わう感じです。

麺とスープ、どちらも料理人の腕が試されます。

その麺とスープを堪能するには他の具材はじゃまです。

だから通はすうどん、掛うどんを食べます。

（**付記**。「掛けそば」とは言うが、「すそば」とは言いません。関西では「掛そば」を何て呼ぶのかな？　江戸時代には、「かけそば」は「ぶっかけそば」と呼ばれていたようです。そばは汁につけて食べていたそうですが、逆に、そばに汁をかけて食べるようになったそうです。）

超簡単です

T君　日本史のクイズを出すよ。超簡単だから答えてね。奈良時代に、宇佐八幡神社神託事件（７６９年）を起こしたとされる人物がいるんだけど、この人物は天皇になろうとして、偽りの神託を奏上したそうなんだ。誰だか分かる？

M君　えーっ。そんな度胸のある人物がいたんだ。

T君　はい、正解！　すごいね。よく知ったね。

M君　えっ？

（**付記**。正解は「道鏡」です。真偽のほどは論争になっています。）

さあどっちかな？

カラスを食べる人間がいるようで、郷土料理として普及させたいようです。

どっちが本当の雑食なのか？　分かりませんねえ。

五月晴れ

―　急いで洗濯物を取り込みます。

妻　雨が降ってきちゃったわ。

（一九）

父　えーっ。さっき晴れてたよな。
子　だから5月（さっき）晴れって言うんだね。

―　子供が新聞の天気予報欄を読んでいます。
子　午前中は五月（ごがつ）晴れになるでしょう。
父　んんっ？　それは5月（さつき）晴れと読むんだよ。
子　それで、午後から曇ってきたのか。

誤解

―　観光で京都を訪れた親子が中華料理店でギョーザを食べました。店を出て、子供が感心してしゃべります。
子　さすが、観光地京都の店員はていねいな言葉づかいをするね。
親　どうして？
子　だって、ギョーザにさん付けしてたよ。ギョーさんお食べやす、って。

恐竜大好き

―　ついにプロ野球界にも2刀流が現れました。
これを聞いた子供は感動し、呟きます。
「そこに潜んでいたのか、生きていたか、2頭竜よ」

聴劇場

劇業型の詐欺が流行っている。詐欺に引っかからないためには犯人の声を録音することが効果的だ。
ある賢いお年寄りは多数のテープを再生しては、その臨場感を楽しんでいるそうです。

（二〇）

思いはどっち

歳をとるとともに、女房が忘れっぽくなってきた。先日は2日続けて今月分の小遣いをもらった。うれしいような寂しいような。

裏表のない人

―　小学校の教師が子供たちを諭します。
うわべと心の中が同じで嘘をつかない誠実な人のことを「裏表のない人」と呼びます。
テレビではハーフっぽい顔立ちの女性が日本人の美徳である「お・も・て・な・し。おもてなし」を盛んに伝えています。
それを聞いた子供が呟きます。
「まずいよ。これじゃあ、日本人はみんな外国人から裏だと思われちゃうよ」

―　孫と祖父の会話。
孫　日本人は国際会議で積極的に自己PRしない、発言しないって言われることがあるよね。でも日本人は表には出さないけど誠実な人柄だと言われるよ。「裏表のない人」ってことだよね。
祖父　そうじゃな。
孫　これってぇ、うわべと心の中が同じで誠実な人のことでしょ。

祖父　うん、そうじゃよ。
孫　　でもね。テレビでハーフっぽい顔立ちの女性が日本人の美徳は「お・も・て・な・し。おもてなし」って、しゃべってるよ。これってヤバクないの？
祖父　表がない。つまり黙して語らずじゃ、な。

早く大人の意識をもとう

―　4月、教授が新入生へ声をかけます。
「階段を一段登って、高校生から大学生になったのだから、早く頭の中（考え方）や行動を大学生に変えなさい」
新入生が答えます。
「先生が僕たちに合わせてください」

改良のチャンスです

―　ある日のテレビニュース。
「地球の温暖化にともない果物にも被害が出ています。温州ミカンでは、果肉と皮の間にすき間ができてしまい、ブカブカになる現象が増えています。これは浮皮（うきかわ）と呼ばれるもので、こうなったミカンは廃棄されます。昨年度の廃棄量は××トンにも達しました。この事態を憂慮し、厚生労働省、いえ農林水産省は新たな品種改良に取りかかりました。」
ダイエットを諦めた女性が呟きます。
浮皮、浮皮、価値なし、価値なし、廃棄、廃棄、品種改良、品種改良。

私を月まで連れてって！

―　ダイエットに挑戦している姉が弟にボヤキます。
姉　ああ、もう月へ行きたい。
弟　どうして？
姉　だってね、月の重力は地球の6分の1でしょ。月だといくら食べても身体は軽いままだもん。
弟　じゃあ、脳ミソも6分の1になるんだ。

おやじギャグ

―　大学の教室で関数や方程式の復習をしています。
教授　最初に、次数の復習をしましょう。関数や方程式の中で、掛け合わせている文字（x）の個数が1個の場合（$y=-2x$）を一次関数と呼びますね。2個（$x \cdot x$）の場合（$y=-3x^2$）を二次関数と呼びますね。では、$x^2 \cdot y$は何次ですか？（腕時計を見ながら）今は、3時ですけどね。
学生　……？

酒の好き、嫌い

T君　酒の好きな人と嫌いな人とでは飲み屋のドア（戸）の開け方からして違う。
M君　へーぇ。そうかい？　どっちも同じだろ？
T君　いや、はっきりと違う。

（二一）

M君　どう、違うのさ？
T君　酒の好きな人は意気揚々と上を向いて開けるね。嫌いな人は飲みたくないので下を向いて開けるね。
M君　……？
T君　上戸（じょうこ）、下戸（げこ）って言うじゃないか。

左党は辛党

S君　甘いものが駄目で、その代わり酒が好きな人を左党と呼ぶよね。知ってたかい？
Y君　砂糖かあ。そのものだね。じゃあ、辛いものが好きな人は何て呼ぶの？
S君　辛党、つまり左党だよ。
Y君　……？

読みの違いは中身の違い

美味しそうに食べている最中（さいちゅう）に聞くのも悪いけど、なぜ君はそんなに最中（もなか）が好きなの？

今日が新年

―　元旦の朝、届いた年賀状を読んでいた小学1年生の息子が父親に訊ねます。
子供　この漢字、なんて読むの？
父親　恭賀新年（きょうがしんねん）（今日が新年）」だよ。
子供　こういう書き方もあるんだ。

（二二）

真の意味

―　男が女を食事に誘います。
男　大通りに美味いランチを食べさせるカフェが開店したんだ。今度、連れていってあげるよ。
―　数日後。
男　ここだよ。さあ、入ろう。

・・・・・・・

―　美味いだろ。この味でこの値段は安いよな。ボリュームもあるし。
男　仕事とプライベートのおしゃべりで楽しい時間は過ぎた。さて、腹も膨れたし、帰ろうか。
―　男は女よりも先に店を出て、駐車場へ向う。女はレジで清算をし、不機嫌な表情のまま車に近づく。
女　なぜ、割り勘にしてくれないの？
男　だって、連れてくるって言っただろ。

それでも有益？

日本全体でみて、大学への入学定員数が進学希望者数を上回る時代となった。そのため授業料を払う意思させあれば、大学へ進学することは特別、困難ではなくなった。がしかし、確固とした専門教育を受けられるかどうかは判らない。
四則演算のできない学生。
自分の住む地域にある都市名が書けない学生。

本や新聞を読む忍耐力のない学生。
ようするに、こう結論を出してまちがいない。学力は不十分であるが、社会へ出す前にもう一度、一般教養を身に付けさせる教育だけは必要であると。
こうした大学での学びをいっさい否定してはいけない。それを否定することは分別のないことである。というのは大学卒業者たちが「学士」という文字を読めたり、書けたりすることは有益なことにちがいないからだ。

偏見のない女

結婚することを誓い合った男女がいる。男は女に勇気を振り絞り自分の過去を打ち明ける。
「なあ真央（まお）、おれさあ、若い頃、芸能人の物真似でオレオレ詐欺をしてたんだ。こんなことを聞くと騙されたって思うだろ？　ごめん。でも、俺、今は真面目にサラリーマンしてるから」
「えーっ。本当？　マジ？　何で早く教えれくれなかったの？　私を騙そうと思ってたんじゃないでしょうね？　でもね、私、テレビの物真似番組を観るの大好きだよ」
「冗談じゃないんだ。詐欺、やってたの本当なんだよ。ごめん。悪い仲間たちと組んでやっていたんだ。今は絶対にやってないからね。安心して。誓うよ」
「本当に??　じゃあ、どんな詐欺してたの？」
「同じプロダクションに所属する有名タレントと一緒に旅行をしたり、食事ができるという仲介をするんだ。1件当たり、１００万円から２００万円の費用を事前にレターパックで送らせるんだよ」
「へーっ。どれくらい、稼いだのかな？」
「多い月で1億円くらいかな。仲間と山分けするけどね。それでも1年間では４０００～５０００万円を稼いでいたかな。でも悪銭身に付かずと言って、すべてパチンコ、パチスロ、競輪、競馬、競艇などのギャンブルに使ってしまったけど。貯金はゼロだったよ。遊ぶ金がなくなれば、また誰かを騙せばいいってね。真央には、ずーーと話そうと思ってたんだけど、話すと結婚してもらえないと思ってさ。ごめんね」
「心配ないよ。私は今の利（とし）ちゃんが好きだから結婚するのよ。昔を振り返れば、みんな何かあるって。気にしない、気にしない」
「ああ、本当かい？　信じていいんだね」
「何よ、それ。こっちのセリフでしょ。もう詐欺なんかしないでちょうだいね。完全に足洗ったんでしょうね。結婚後は私、専業主婦になるんだからね。利ちゃんに働いてもらわないと食べていけないからね」
「ああ、もうやってないしこれからも絶対にしないよ。これだけは信じてくれ。真央を幸せにできるよう真面目に働くよ。もっともっと働いて稼ぐからさ」
「じゃあ、昔を思いだして、1回だけ誰かの物真似をやってみてよ。できるんでしょ？　見たいもん。利ちゃんの物真似」
「え～～。昔のことは、もう聞かないって約束をしてくれたら、1回だけ、やって見せてもいいけど？」
「判ってるてぇ。1回だけでいいから。ねぇ、物真似、見せて？　聞かせて？　ねぇ～ねぇ～～」
「……じゃあ、やるよ。これは、判るよね。『こんばんは、♪お袋さんよ、お袋さん～♪』」
「ああ、簡単！　超簡単！　森進（一）よね。うまいじゃん。これで騙したんだ。なるほど。もう1人か2人、やって見せて」

（二三）

（二四）

『♪はるばる来たぜ函館へ、逆巻く波を乗り越えて～♪』、『僕のお父さんは坂妻（阪東妻三郎）で、お母さんは阪妻の妻です』、『アッタクチャンス』」

「上手い、上手い。さぶちゃんと確かニコスカードのあのキザッポイ男優よね。それにクイズ番組の司会さん。なんていったかなあ？　博多華丸、いや大吉かな？」

「ああ、判ってくれた」

「その声で騙してたんだ。なるほどねーえ。上手いねえ。ところで利ちゃん、この前聞いたけど、利ちゃんの年収って３００万円くらいだよね。それ税込みでしょ。ねえ、それで贅沢できると思う？　私、指輪や高級車も欲しいもん」

「ごめん、２人なら食っていけそうだけど？　やっぱ稼ぎ、少ないかい？」

「じゃあ、昔の仕事に戻って、稼いでもらお～かなあ～」

赤点

―　定期試験の成績表を持ち帰った高校生の兄が呟きます。

「ちぇ、赤点が３科目かあ。来週は再試（験）だあ。ヤバイなあ」

そばにいた小学生の弟が成績表を覗き込み、

「兄ちゃん、みんな黒じゃないか？」

と、言って兄の顔を見ます。

「お前はいいよな。まだ赤と黒の区別をしなくてもいいんだから」

「だって、みんな黒だし、どこにもアカン点とは書いてないじゃん」

異名

玄鳥（げんちょう）って、ある鳥の異名なんだけど、どんな鳥だか判るかい？

判んな～い。そんな鳥いたっけ？

ツバメの異名だそうよ。

へーっ、ツバメは燕尾服って書くんじゃないの？

浅慮でいい

息子と旅行をしていた父親が帰路の飛行機へ搭乗する前にスマホのメールを使い、自宅で待つ妻へ旅の想い出を普段よりも長い文面で送信した。即座に届いた妻からの返信メールは２文字であった。

了解。

これを観た息子が言った。

「お父さん。普段のおこないが良くないのじゃない？」

正しい「かんじ」を手書きしよう

T君　宴会の「かんじ」を引き受けたのだけど、「かんじ」ってどんな「かんじ」だったかな？　案内文に連絡先として入れたいのよ。

M君　日本語の「かんじ」には意味があるから。「かんじ」は汗をかいて宴会を取りまとめる人のことだから、「かんじ」で書くと、こう「汗人」じゃないの？

T君　あぁ、そうか。汗をかく人だよね。のんびり飲んだり、だべっ

てられないからね。

H君　いや、違うよ。「かんじ」は心配りが大切だから、「汗心」って書くのさ。

T君　心配りかあ。確かにそうね。じゃあ、どっちなのよ？

部長　どっちでもいいのかもしれないぞ。意味が通じればいいわけだからね。重複と書いて、ちょうふくともじゅうふくとも読むだろ。

スーパードライ

ビール飲み放題の宴会を開催した。毎回、欠席をする若い社員がいる。酔っ払った上司が不満そうに幹事に向って「朝日君の欠席理由はなんだ！」と詰問した。

幹事が答えた。

「朝日は、人付き合いではスーパードライですから」

カエルとヘビ　①

大昔に、大きなカエルがいました。大きなカエルは水辺の草についている虫を長い長いべとっとしたベロにくっ付けては喉へ押し込んでいます。

水辺には虫を獲物とするヘビも棲んでいました。ある年、雨の降らない日が続き、草むらも乾燥し、寄ってくる虫も数少なくなってしまいました。お腹を空かした大きなカエルは久しぶりに草の葉に生き物の気配を感じ、長い長いべとっとしたベロを伸ばしくっ付けて一気に飲み込みました。必死に飲み込んだので、何を食べたのかさせ判りませんでした。が、どうやらカエルはバッタを飲み込んだようです。カエルが満足し、うたた寝をしているそのすぐ近くにヘビがいて、うらめしそうにカエルを見つめています。ヘビも生き延びるために必死です。また、虫が飛んできました。トンボです。ヘビが取ろうとしたトンボをまたカエルが横取りしました。次に、またヘビが取ろうとしたカマキリをカエルが食べてしまいました。その後も何度も何度もカエルはヘビよりも長いベロをうまく使って横取りを繰り返しました。

とうとう、獲物を取れないヘビたちの中には餓死するもの、共食いをするものまであらわれました。そして、ヘビたちは相談し、結託をして、この大きなカエルを取り囲み、睨みつけ、一歩も動けないようにしてしまいました。

「そこの欲張りカエル！　よくも俺たちの獲物を横取りしてくれたな。それも一度や二度じゃない。絶対に絶対に許さない。覚悟しろ！」

1日、2日……、200日が過ぎました。この間、ヘビは子孫を増やし続けましたが、大きなカエルは残すことができませんでした。なぜならヘビのあの気味悪い氷のように冷たい100億個以上の眼ん玉で睨みつけられ続けてきたからです。微動だにできるわけがありません。

こうなるまでに、大きなカエルは何度も何度も頭を下げて謝りました。しかし、ヘビは睨みつけたままで許してくれませんでした。ヘビの怨念ほど怖いものはありません。逆に、ヘビは脅し続けます。

「カエルよ。お前は生き物のなかでも最低だ。お前の超欲張りのために我々の仲間や子供たちは命を落としてしまった。未来永劫、恨み続けてやる」

こうして1年が過ぎていきました。カエルは草葉に付く露を飲んでは飢えをしのいでいました。しかし、体力、気力とも、もう限界です。それを察したのか、ヘビは言いました。

（二五）

「１００億回、頭を下げて謝れば許してやろう」
しかたありません。大きなカエルはきっと死んでしまうだろうと覚悟を決めて、ヘビの鼻先で、
「お許しください」
「お許しください」
・・・・・・
「お許しください」
と頭を下げ続けます。まるで人間が土下座をしている姿勢です。
それから何年にもわたって頭を下げ続けました。途中で、大きなカエルはヘビがうたた寝をしているすきに何度も何度も逃げようとしました。が、逃げきれる体力はすでにありませんでした。また逃げようとするその度に、１００億個以上のキッと見開いた眼ん玉でヘビは大きなカエルを睨みつけました。生まれたての赤ちゃんヘビまで親の真似をして、カエルを睨みつけます。
「お許しください」
「お許しください」
・・・・・・
「お許しください」
ようやく頭を１００億回下げることができました。それからカエルはヘビの眼ん玉から解放されましたが、そのときには大きかった身体も痩せ細って小さくなってしまっていました。こうしたことがその後、幾世代にも受け継がれて、どのカエルもヘビに睨まれると動けなくなってしまったのです。

（二六）

カエルとヘビ　②

あの日、あの時以来、どのカエルもヘビの前では微動だにできない状態になり、運が悪ければヘビに飲み込まれる立場になってしまった。ところが、この超長年にわたる沈黙を打ち破ることが起こります。
「いつまでもヘビに睨まれぱなっしじゃあ、ご先祖様に申しわけない。このあたりで仇を打っておかないと、未来の子孫たちにも悲しい思いをさせるばかりだ」
という勇ましいヘビが現れました。その名はオオヒキガエルです。オオヒキガエルの身体は大きいもので15センチメートルほどの巨体で、かつ貪欲で口に入る物は何でも食べる習性をもっています。
「ボボボーボボボーボボボー」
まるで闇夜に化け物が唸っているような声です。
ある日、水辺で餌を漁っていると、オオヒキガエルはヘビと鉢合わせになってしまった。ヘビのあの冷え切った眼を見た瞬間、やはり先祖から申しおくられてきた嫌悪本能でしょうか、オオヒキガエルの身体は硬直してしまいました。微動だにできません。
絶対的優位な立場にあるヘビは、
「何だ。カエルか。そこをどけ。この恥知らずの欲張りめが。どこかへ失せろ！」
と、見下すように命じます。
恐怖で凍り付いてしまったカエルは張り裂けそうなドクンドクンという心臓の雑音を聞きながら、それでも貪欲であるがゆえに、冷静に自分の胃袋とヘビの大きさとを頭の中で描きました。
「飲み込まれることはない。この俺の身体、脚1本たりとも飲み込め

るような口じゃねえ。たとえ、こいつが顎を外し全開しても飲み込まれることはないだろう。こいつはチビだ。チビのくせに俺をなめやがって」

さらにオオヒキガエルは空想します。

「もし、万が一あったとして、俺がこのヘビを飲み込んでも、俺の胃袋には十分な空きスペースが残るだろう。怖いけど、喰ってやろうかな」

硬直し微動だにできないオオヒキガエルに対し、チビヘビはたたみ掛けます。

「どこかへ失せろってんだよ！　でなけりゃあ、1億回頭を下げさせるぞ！」

この言葉を聴いたときです。オオヒキガエルはご先祖様から教え伝えられてきた、屈辱感がふつふつが湧き上がってきました。チビヘビが生意気にもオオヒキガエルの鼻先にまだまだ短いベロをチョロチョロと着けてからかおうとした、その次の瞬間、オオヒキガエルは大きく口を開き、無我夢中でヘビの頭を飲み込みました。頭を飲まれたヘビは胴体を空中にクネクネさせるばかりでした。しばらくするとヘビの姿はなく、完璧にオオヒキガエルの胃袋におさまってしまいました。オオヒキガエルは舌舐めずりをして、してやったりという表情で、

「ボボボーボボボーボボボー」

と、啼きました。

カエルのヘビに対する幾世紀にもわたる屈辱感を払拭することになった瞬間でした。このことがあってから、カエルの中でもオオヒキガエルは、ヘビを恐れず飲み込むことができるようになり、ヘビの天敵となったのです。貪欲というのは怖いものです。

（付記。アフリカウシガエルも獰猛なカエルである。体長は20センチメートルもあり、オスは蛇、牛や像にも体当たりし、噛み付いて追い払う。）

カマキリと働きアリ

―　愛を語る。

カマキリ　人生における最大の喜びは誰かを愛することだよな。アリくん。

働きアリ　僕はそう思わない。人生で最大の喜びは働いて長生きをすることだよ。

カマキリ　一体全体、君は毎日、働きどおしで、楽しいのかい？　女王様や幼虫のために餌を運搬することが運命づけられているだけじゃないの？　働くことを運命づけられた君は女王様を自分の妻にすることはできないのだろ？

働きアリ　そういう君だって生きているうちに結婚できるとも限らないだろう？　僕は君がいうとおり、女王様にお仕えをしたり、餌を運搬して自分の人生をまっとうしたいのさ。これは運命だけど、幸せさ。僕たちは、身分は違うが、一心同体だよ。

カマキリ　一心同体だって。じゃあ聞くけど、君は女王様に愛を感じることはあるのかい？　きっとないだろう。愛のないgiveじゃないか。誰かを愛するということはすばらしいことだよ。

働きアリ　愛、愛って、じゃあ、君。愛ってなんだよ。giveじゃないのかい？　答えてくれよ。

カマキリ　解かっちゃいないね？　愛っていうのは、なにかを許すことだろ、なにかをゆずることだろ、

（二七）

つくしたいという気持ちだろ。

働きアリ　最後の「つくしたい気持ち」は僕と同じじゃないか。

カマキリ　君のようなつくし方はまだ愛とは言えないのだよ。単なるgiveじゃないか。君は結婚できないのだから、まだ自己犠牲の精神がないのだよ。愛とは単なるgiveじゃないのさ。身も心もささげることだよ。

―　こうしてカマキリのオスは毎年、交尾後にメスに喰われることを許し、自分の身体を食料としてゆずることで愛を実践してみせているのです。

（**付記**。選ばれた雄アリのみが空中で交尾後、力尽きて死ぬ。働きアリは通常、女王アリが出すフェロモンによって不妊の状態に制御されてしまう。カマキリの他に共食いをする生物としてコガネグモがいる。このクモのオスの生殖行為は生涯のうち2回までと限られている。また、交尾に10秒以上かかるとメスに食べられてしまうそうだ。この共食いは健康で生存率の高い子孫を残すためであろう、と言われている。*The Japan Times Weekly*, May1-May8, 2010）

君たちは小学生？

S君　金曜日の5時限目が終ると、1週間が終ったって感じだよねぇ。

K君　でもさあ、月曜日の1時限目はきついよねぇ。

AとOとはかけ離れている

ES細胞（胚性幹細胞）、iPS細胞（人工多機能性幹細胞）よりも、より簡単に作製できる万能細胞（どんな細胞にでもなれる特別な細胞）

（二八）

が発見された。普通の細胞を紅茶に含まれる酸性の液に25分浸けるだけで、自発的に万能細胞（STAP、刺激惹起性多機能性獲得細胞）になるそうだ。ノーベル賞級の発見である。

しかし、この発表後、1カ月足らずのうちに、すでに公刊された論文の実験画像を切り張りしたものであったり、本文が孫引きであることなどが確認された。

かなり広範囲な再生医療への実用化が期待されたが、正夢をみることなくSTOPした。

（**付記**。なんでもそうであるが、簡単なことほど一番難しい。2014年12月26日、STAP細胞は存在しないことが確認された。）

夢の球速

実況者　今日の○○投手のストレートはいつにも増して速いですね。おっと、これもすごい！　球速180㎞が表示されました。なんと、これは世界新記録です！　○○投手自身が持つ記録を大きく塗り替えました！　まさに世界最速の男です。解説者のNさん、この記録、どこまで伸びますかね。

解説　できれば、リニアモーターカーに追いついて欲しいですね。彼ならきっとやってくれるでしょう。

野球一筋

―　逆転さよなら満塁ホームランを打った選手へのインタビュー。

インタビュアー　会心の当たりでしたね。打った瞬間、いったと思ったでしょ。

選手　　どこへ？
インタビュアー　さて、打ったのはどんなボールでしたか？
選手　　丸くてね、これくらいの大きさで、いつものサイズですわ。

汗と涙

―　優勝力士がインタビューを受けて感極まり涙を流す。
インタビュアー　関取、初優勝、おめでとうございます。うれし涙も出ますよね。
関取　　違います。これは涙ではありません。汗です。
インタビュアー　目から汗が出るほど精進したことが今回の優勝につながったのですね。

ヘビが好きな弟

―　兄弟。
兄は夏休み中、毎日のようにプールで泳ぎ、真っ黒に日焼けした。
秋になって手足の皮膚がボロボロとはがれ、まだら模様になった。
それを見た弟が言った。
「兄ちゃん、脱皮が始まったんか？」

正しい歴史的事実

―　現代を生きる子供たちの会話。
A君　　ねえ、知ってる？　昔さあ、巨人、大砲、ぶっぱなす、っていう言葉が流行ったんだってね。
B君　　違うよ。巨人、大砲、持ち上げる、だろ。
C君　　2人とも、かんぺきに間違っているよ。巨人、大砲、雇う、だろ。だってレギュラーに元メジャーリーガーが多くいるぜ。
D君　　それを言うなら、巨人、阪神、天王山、だってば。
E君　　もう困るなあ。これは常識だよ。巨人、大鵬とくれば、次は柏戸、だよ。
おじさん　残念だなあ。良い子のみんなは正しく覚えてね。
　　巨人、大鵬、卵焼き。

耳力

―　日本人が外国人に訊きます。
日本人「あなたは、どれくらいビールが飲めますか？」
外国人　ほんのa little=ア・リトル(が流暢にa litre=ア・リター)です。
日本人　そりゃすごい。酒豪ですね。
―　『セロ弾きのゴーシュ』は善人ですが、セロ弾きのゴートゥは悪人です。
―　太宰治は女性に人気のある作家ですが、ダサイ治はもてません。

ホラー

『注文の多い料理店』は客がある種のホラーを感じますが、みすぼらしい姿をした客の注文が多いと店主はホラーを感じます。

（二九）

何事も訓練です

子供の頃から米を主食にしてきた女性が小学校の教師として赴任した。
毎日、教室で子供たちと給食を食べることになった。
「このお米、ちょっと……」
先生の箸が止まります。
「先生！　どうかしましたか？」
生徒が尋ねます。
「先生ね。新米しか食べないから、ね……」

誤記？

子　お父さん、思わず保証人欄に自分の名前を記入しちゃったよ。
父　俺、そんなに信用ないか？

真打ちと前座

真打ちは、う～ん、とうならせる。
前座は、う～ん、とがっかりさせる。
真打ちは、お客の集中力を誘う。
前座は、お客の鼾（いびき）を誘う。
真打ちは、客席を満たす。
前座は、客席を空ける。
真打ちは、トリ。
前座は、タマゴ。

（三〇）

専業主婦

―　亭主が女房に聞いた。
亭主　俺が出勤した後、お前、いつも家で何してるんだ？
女房　台所の洗い物して、新聞を読みながら、洗濯機をまわして、『どうぶつの森』して、それから買物に行くんだよ。
亭主　『どうぶつの森』って、何だ？
女房　ゲームだよ。
亭主　ゲーム！　毎日、洗濯して、ゲームして、買物に行くだけか？
女房　だって、これが私の専業だもの。
―　別の日。亭主が女房に聞いた。
亭主　今年のＧＷは何連休だ？
女房　……？
亭主　お前、興味ないのか？
女房　……？
亭主　そっかあ。お前、毎日が日曜日だもんな。

門出のあいさつ

大学への進学が決まり、４月から自活を始める一人息子が実家を出る朝、父親に言った。
「父さん！　母さんには嫌われるなよ」

美文

土下座（どげざ）を「蜘蛛になっておじぎをする」と描けば、文学的な表現になります。

庶民の気持ち

―　消費税率の引上げ。
僅かな貯えはカツオ節をかくように減る。

驕れる者

ボクシングの試合前、どの選手も面構えはカッコイイ、強靭なコメントもカッコイイー。
でも、早々にKO負けした選手は一気に風船がしぼんだみたい。カッコワル〜〜。

清め過ぎ

妻が知人のお通夜から帰ってきた。インターホーン越しに清めの塩を掛けてくれ、と言う。夫は「OK」と答え、台所へ行き卓上塩を探したが、見当たらない。ようやく食品庫に口の開いていない1kg入りの塩袋を見つけ、玄関へ持って出て、「これでいいか?」と訊ねた。

魔法のリモコン

夫は綺麗な女優さんが出演しているテレビドラマしか観ない。リモコンでチャンネルを次から次へと押しては、探している。
突然、リモコンを妻に向けて、
「ピィ」
と声を出した。
妻は「変身できません」と、ふくれ面をした。

大晦日

妻　お父さん！　明日はお正月だね。今夜から、新しいパジャマにしてあげるから。
夫　子供の頃を思いだして、とてもとても嬉しかった。

テレビ

娘　テレビばかり観ているとバカになるって本当なの？　なにか、根拠あるの？
父　あるさ。だって、テレビって[テ]ストで[レ]イテンとって[ビ]リになるっていう略だよ。

ヘモグロビンの味

果物ナイフでリンゴの皮を剥いていると、うかつにも指先を切った。

（三一）

思わず、指を口にくわえ、血を吸った。何やら金気を含んだ錆臭(さびくさ)い味がした。鉄分（*Fe*）が足りていることを実感した。

不幸？

長く生きて不幸を習熟しきった老夫婦は互いに相手の話に決して反対意見を述べない。

横領

売れない作家が妻の半生を小説にすると、ベストセラーになった。「あなたは私の過去を横領した」と、号泣された。

初犯者？

―　現行犯逮捕されたコンビニ強盗。
つい出来心でやってしまいました。2度としません。今回は大目に見てもらえませんか。今回だけは……今回だけは……お願いです。
仁王立ちした刑事の顔は笑っていたが、笑わない目が強盗を睨みつけていた。

何かに不安で飲む酒

その不安を溺(おぼ)れさせてしまいたくて、胃袋のなかで酒が動く音を立てるまで飲むわけです。

（三二）

ブレーキ音

ヒヨドリのキイ〜キイ〜と啼く音は油の切れた自転車のブレーキ音に似ている。

軽薄な人へ

自分を立派に見せようと思えば、舌に重石(おもし)をつけるべきです。

発音の違い

当店では、あなたがお探しの高級な棚（good rack）の在庫を十分に用意しておりません(good lack)。申し訳ありませんが、頑張って(good luck)、他店を探してください。

ニート

―　開店前から焼き肉店に若い人の行列ができている。
「まだ昼飯の時間じゃないぞ」
「みんなニートで働いてないんですよ。ここは人気店で、早くしないと売切れちゃうんです」
「じゃあ、うまく定職（食）にありつけるといいな」

ハンカチ

悲しいとき、涙を流して泣きますよね。
それはね、お気に入りのハンカチを使うためですよ。

笑う

嬉しいとき、大口を開けて笑いますよね。
それはね、身体の中に溜まった幸福ビームを他人(みんな)に吐きかけるためです。

酒は涙か

悲しいとき、なぜ酒を飲むのかな。
それはね、流す涙を補充するためです。

鳩オヤジ

あぁ、お父さんが起きてきた。
「朝ごはん時だね」
あぁ、2階からお父さんが降りてきた。
「お昼ご飯時だね」
あぁ、お父さんが帰ってきた。
「夜ご飯時だね」

復活

―　赤字の歯科医。
ミニスカート姿の可愛い歯科衛生士を雇ったら、患者が増え始めた。
歯医者復活です。

足臭

散歩中の小犬、くんくんとご主人様のスニーカを嗅いでいる。ちらっと上目遣いでご主人様を見ながら、スニーカにオシッコをかけた。

不満、あるのかな？

小犬を連れた男が信号待ちをしている。小犬は震える片足を上げ、ご主人様の足首にオシッコをかけた。

小説、随筆、作文、駄文

嘘を上手く描き切るのは、小説。
嘘を描かずに心のうちを素直に描くのは、随筆。
どちらでもないのは、作文。
どれにも該当しないのは、駄文。

（三三）

潜在能力

―　ある作家の短篇小説を読了後。
もしかしたら自分にもこれくらいの短篇なら書けるかもしれない、と思う。
ストーリを作ってみる。
剽窃、盗作、孫引であれば書けそう。

商売上手

プラスティックで作られたバケツに木の柄を挿し込んだ雪はね用のスコップの挿し込み部分の柄が折れた。「ここが折れるか？」不思議ではあったが、しかたなくアウトドアショップへ買いに行った。店頭にはバケツと柄が別々に売られていた。なるほど、納得。

結婚熱望作家

作家　恋文というのは単なる作文ではいけません。ある種の文学作品です。よってその内容や表現には相手の心に訴える、あるいは響く力が必要です。
友人　そんなあなたが何故、失恋を繰り返すの？

食習慣

女房が作る休日の昼食は決まってウドン、あるいはソバである。

（三四）

今日も「昼飯は何？」と訊くと、「ウドンかソバを湯がきます」という返事が返ってきた。
亭主は少々、不満声で「毎回、ウドンかソバじゃないか。定番か？
今日はいい。俺、外で食ってくるから」と自宅を飛び出した。
駅の地下食堂街、亭主はウロウロと物色し、思案したあげく、暖簾の掛かった蕎麦屋へ入った。

Barber

―　坊や、おばあちゃんとお手つないで、どこへ行くの？
散髪屋さんだよ。
―　おい、健坊、ジイジイが散髪に連れて行ってやろう。
いやだー、バーバーがいい。

人生で大事なこと

いい人に出会うことです。はい。

愚問

―　カンニングをして見つかった学生へ。
なぜ、したの？

歯医者の治療説明

分かり易く、噛み砕いて説明してください。

老人の特権

嫌われても、人生訓を垂れることができる。
物忘れを歳のせいにしても許される。

若人の特権

失敗は許される、と言ってもらえる。
他人の話を理解できなくても許される。

幸運の痛み

年の瀬に宝くじが当たった。少額ではあるが金が手に入った。彼はたいそう優しい気持ちになった。これを天からの恵みと理解した。
次に、何か立派な善いことをしようと決心した。
冷たい空気が公園に降ってくる季節であった。1人のみすぼらしい男がコートを着ずに俯いたままベンチに座っていた。彼はむらむらと施しがしたくなった。無言で男の手に万札を数枚、握らせた。歩き出した彼はウキウキした気分で鼻高々に寒空を仰いだ。心は充実感で張り裂けそうであった。
ところが、ベンチの男が追いかけてきて、さんざん彼を打ちのめした。
なぜなら、その男は乞食ではなかったから。

太陽

―　春。
太陽は暖房のスイッチを入れて、冬に復讐する。

警告

夢をもつ人は、それを実現しないように用心しなさい。
さもないと、いつか他人と同類になるだろう。

避けられないもの

運命は避けられない。
誕生と葬式の間にあるのは悩みだけ。

心を自由に

悲しいときは泣きまくれ、
嬉しいときは笑いまくれ、
いつも自分の心の監視をするな、
命にかかわることもないだろうから。

無に帰した発想

牛たちは、ふと乳の代わりに卵を産む義務があると感じた。この発想

（三五）

はすべて「無」に帰した。なぜなら、牛たちは乳を出すようにできているから。

窓

春の優しい微風に触れて、窓はおだやかにあくびをし、その口にカーテンをあてる。

言葉

―　努力が報われた人。
諦めさえしなければ、可能性は無限なのだ。
可能性を信じる気持ちを持ち続けよう。
報われるよう努力しました。

―　努力が報われなかった人。
俺には運がなかったのだ。
できることは全てやった、悔いはない。
楽しむことができました。

八つ当たり

ときどき、カラスに向ってカーカーと叫びたくなる。

（三六）

公聴会

―　歳出削減に関する公聴会。
国民代表Ａ　議長！
議長　はい、Ａさん。
Ａ　国会議員には夏と冬のボーナスが支給されてますよね。まず、この事実を確認させてください。総理、どうなんですか。
内閣総理大臣　議長！
議長　はい、内閣総理大臣、ぼろ儲け君。
内閣総理大臣　確かに、私をはじめ国会議員はボーナスをいただいております。
Ａ　議長！
議長　はい、Ａさん。
Ａ　それではお訊きしますが、総理、あなたを含め議員さんたちはどんな付加価値を生み出しているのですか。ボーナスというのは余計に働いて得た利益を分配する制度ですよね。民間企業でも国家公務員でもない、あなた方がどんな価値や利益を出したのですか。どうなんですか、総理！
内閣総理大臣　議長！
議長　はい、内閣総理大臣、ぼろ儲け君。
内閣総理大臣　そういう誰も気づかない質問にお答えして、国民の理解を得るよう余計に努力をしていることへの報酬とお考えいただきたい。

人が先か、神が先か

神を信じる人が居て、初めて神は存在しうる。よって人が先でしょ。

励まし

子供　神様は全能だから、勉強しなくてもいいのでしょ？
父親　それだけ苦楽を知らないってことだよ。そんな神を信じるかい？

大きな出費

母親が鏡台の前でうす化粧をしながら、幼い娘に声をかけます。
「今日、牛乳の特売日なので買いに行ってくるから、お留守番をしてくれる。クレヨンでお絵描きしててね。すぐに帰ってくるから」
「は～い」
娘は画用紙にお母さんの顔を描いて待ちました。唇とほっぺはお母さん愛用の口紅を使いました。

（了）

（三七）